

〈展示会報告〉近現代広島都市化と地域社会

—肥料をめぐる都市と農村の交錯—

伊藤 公一（広島市公文書館歴史資料専門員）

一 趣旨

近世において、都市で排泄された人糞尿¹が肥料として流通していたことは、よく知られている。肥料としての人糞尿の活用は、その後も脈々と続いてきた。しかし、市場を介した人糞尿の処理はしだいに困難となり、行政・民間業者による汲取りや、下水道による処理へとシフトすることとなった。

都市におけるこうした尿処理のあり方の変化の背景としては、都市の人口増加と、農村における化学肥料の普及とが指摘されてきた。近年では、都市衛生への関心から、都市におけるし尿処理方法やその効果に関する研究が行われるようになってきている。しかしながら、人糞尿活用をめぐる農村側での様々な動きは、これまで十分に紹介されてきたとは言いがたい。

広島市公文書館には、合併町村の役場文書が豊富に保存されており、その中には、農業技術の普及や肥料の流通に関わる文書も含まれていることから、断片的ながら、人糞尿の流通や施用に関する情報も得られる。

そこで本展示会では、近郊農村の史料を通して、近現代広島都市化と人糞尿処理の歴史を振り返った。本稿では展示物の一部を紹介し、解説を加える。

二 展示概要

展示会では当館所蔵の町村役場文書、広島市の発展や河川流通・し尿処理に関する写真等を展示した。会期中は多くの方に御来館いただき、太田川やし尿に関する思い出話をされる方や、関連資料や歴史的背景について質問される方も見られた。開催の概略は次の通りである。

(1) 展示会場

広島市公文書館 7 階ロビー・閲覧室

(2) 展示期間

平成 31（2019）年 3 月 22 日（月）～令和元（2019）年 7 月 1 日（月）

(3) 入場者数（期間中の来館者数）

1,268 人

(4) 展示資料数

32 点



会場風景写真



チラシ

三 展示内容

人糞尿の汲み取りと活用

近世日本では、都市近郊の農家が人糞尿を購入し、肥料（下肥）として活用することで、都市の衛生が維持されてきた。広島も例外ではない。安芸郡・沼田郡・高宮郡南部の諸村の川船の多くは、城下町から人糞尿を輸送するための肥船であったといわれる。肥船は年貢米輸送にも徴発されたほか、野菜などの作物を広島城下へ輸送するためにも利用され、それらの荷物を降ろした後、契約関係にある各戸から汲取った人糞尿を農村へ持ち帰った²。

人糞尿の流通と農地への人糞尿施用は明治期以降も続けられた。1891（明治24）年頃には、沼田郡の人々が広島市や郡内の商家から各種の肥料を購入するとともに、「広島市街及び師団其他官庁ノ屎尿及び厩肥ヲ購求」していたことが記録されている³。つまり、近代においても、農家は代価を支払って人糞尿を購入していたのである。同時期に広島県は、「第五師団及び呉鎮守府ヨリ払下グル所ノ屎尿甚ダ巨多ナルガ故ニ、新ニ屎尿問屋ノ如キモノヲ設置シ或ハ其仲買ヲナス者増加」しており、「市街戸口ノ増加スルニ随ヒ建肥ヲナスコトモ亦一層容易」になる傾向があると認識していたことから⁴、人糞尿の流通はより活発化していたことがうかがえる（図1）。

明治前・中期において、各町村では役場・学校などが設置・整備された。こうした場には便所も新設され、人糞尿が集積された。公共施設の人糞尿は入札による売却などにより処理された⁵。

広島市から農村地帯への人糞尿の運搬については、以下のような証言がある。昭和初期、工兵第五大隊は長束村（現安佐南区長束⁶）・牛田村（現東区牛田）間などで渡河訓練を行った。訓練中の兵士は、しばしば太田川の川水を飲もうとした。工兵第五大隊で志願兵の教育にあたった、ある少尉は、「太田川 清き流れと 思うなよ 上り下りに肥船の数」と吟じて彼らを戒めたという⁷。太田川では肥船が盛んに行き交っていたのである。

近郊の農山村は広島市へ野菜や果物、木材、薪炭等移出し、広島市からは傘や針、肥料、後には糸や布、自転車などの工業製品を移入した。1890年代の安芸郡温品村（現東区温品）の場合、肥料は移入額の5割から7割程度を占めており、海産肥料・人糞のほか、石灰も移入されていた。1899（明治32）年の肥料の購入額は、海産肥料1,914円、人糞924円、石灰188円で、肥料中での人糞のシェアは3割以上であり、その数量は12,000荷に及んだ⁸。これに先立つ明治18（1885）年の中山村においても、人糞は金額ベースで各種の海産物を合算した金額に次ぐシェアを有し、「田畑一切ニ用」いること、



図1 「肥買入売捌所並二旅籠屋商 広島台屋町 信家九兵衛」(『広島諸商仕入買物案内記並二名所しらべ』1883(明治16)年)



図2 太田川の帆船 (1937(昭和12)年、安佐郡可部町、渡辺義氏撮影)

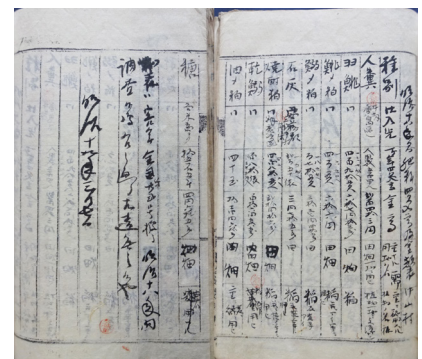


図3 「明治十八年間肥料買入高及金額表」(「諸進達 甲」1886(明治19)年、中山村役場文書255)

表1 安芸郡中山村における肥料の購入(1885年)

種別	仕入元	仕入額 (構成比)
乾鰯	本県広島区	116.55 円
羽鯡	本県広島区	67.13 円
鯡粕	本県広島区	66.00 円
鰯粕	本県広島区	31.45 円
人糞	本県広島区	243.00 円 (43.06%)
焼酎粕	本県広島区	20.16 円 (3.57%)
油粕	本県広島区	11.60 円 (2.06%)
糠	各米商ヨリ	4.65 円 (0.82%)
石灰	安芸郡	3.75 円 (0.66%)

(出典) 図3と同じ。

「植物一切ニ支障」なく施用できることなどが報告されていた (図 3、表 1)。

農村に引き取られた人糞尿はどのように施用されたのか。1910 (明治 43) 年頃、安佐郡農会により作成された「配付種子栽培ノ大要」(図 4) には、大根の栽培方法が記されている。これによれば、種まき前に 1 度、種まき後収穫までに 2 度の施肥を行う。その際施用される肥料は専ら人糞尿であり、1 反当たり合計で 33 ~ 34 荷程度の施用が推奨されていた。

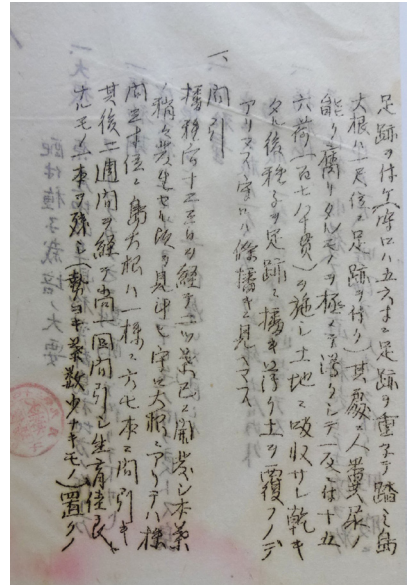


図 4 「配付種子栽培ノ大要」明治 43 (1910) 年ごろ 部分 (「農会二関スル書類」大森村役場文書 2725)

人糞尿供給の増加

人糞尿市場は、大正期以降に転機を迎えることになる。この時期の広島市および近郊農村全体の人糞尿の需要量・供給量を示す直接的なデータは得られない。しかし、大正期から昭和戦前期にかけて、供給量の増加と需要量の減少とが同時に進行したものと考えられる。

人糞尿供給の増加を示唆する指標としては、国勢調査人口が挙げられる。広島市の国勢調査人口は、1920 (大正 9) 年には 194,055 人であったが、1935 (昭和 10) 年には 310,118 人に増加した⁹。15 年間で約 1.6 倍、年率では約 3.17% の伸びである。おおよそ高度経済成長期と重なる 1955 (昭和 30) 年から 1970 (昭和 45) 年の間でさえ、15 年間で約 1.54 倍、年率で約 2.91% の伸びであった¹⁰。1920 年から 15 年間の人口増加のインパクトの大きさがうかがえる。

1 人当たり人糞尿の生産量は、おおよそ一定であると仮定されよう。生理的な限界があるからである。そうだとするならば、広島市における人糞尿の生産量 (排泄量) もまた、1920 年から 1935 年の 15 年間の人口と同程度、すなわち 1.6 倍程度に増加したものと考えられる。

人糞尿需要の減少

大正期には都市における労働者の増加や米騒動の発生を背景として米の価格抑制が求められた。植民地朝鮮・台湾での米の増産と移入促進が図られ、米価は相対的に低下した。これを受けて、郡・町村の農会は、政府に対しては米価の維持を求める一方、農家経営のコスト削減を図った。

コスト削減策として、人糞尿の購入・施用の促進が提案されることもあった。1923 (大正 12) 年、温品村・船越村 (現安芸区船越) の農会長は連名で安芸郡内の各町村長・農会長に宛てて、「呉市の糞尿塵芥を当安芸郡内に引受け」ることを提案し、協議をもちかけている。彼らは、「刻下ノ農村経済ハ農産物ノ低価に伴ひ非常なる疲弊困憊を加へつゝあるに不拘農家の使用する肥料は依然として比較的高価」であるとの現状認識を示し、「就而は小生等同志と相謀り曩に第五師団並に広島市の糞尿塵芥等の払下に関し微力を致居り候、幸に各位の御厚庇により下肥価格も一般に大なる低下を見たる等好結果を看し居候処尚数量に不足を感じ居り候」として、呉市からの糞尿等の引き受けを提案している (図 6)。農産物価格の下落に対し肥料価格は高止まりしており、その対策として第



図 5 広島大手町一丁目 (絵葉書、大正期)

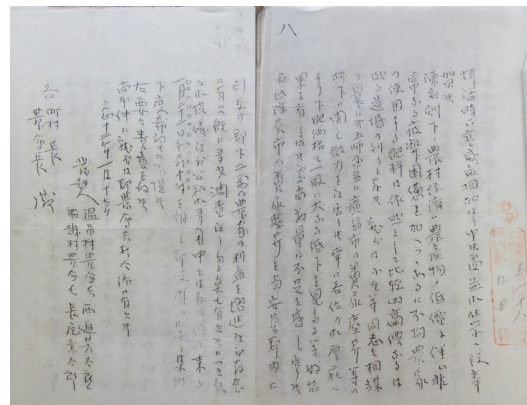


図 6 1923 (大正 12) 年 1 月 17 日付温品村農会長・船越村農会長発、各町村長・農会長宛文書 部分 (「農会二関スル書類」温品村役場文書 2973)

五師団・広島市等からの人糞尿・ゴミの入手について努力してきた、「各位」の厚意によって人糞尿価格は低下し、安価で購入することができているが、なおも下肥の数量は不足しているというのである。

ここで指摘されている「下肥価格」の「大なる低下」は、関係者の厚意、あるいは共同購入などの合理化努力のみによって説明されるものではない。前述の供給増加も一因となっていたであろうし、以下に見ていくように、農村側の需要が減少しつつあったことも考慮されるべきだろう。

まず、人糞尿が施用されるべき田畑の動向を見てみよう。1920年から1935年の広島県全体の耕作地の面積は、112,485.4町から110,158.5町へ約2%減少している。このうち、田の面積はほぼ横ばいであるが、畑は36,002.8町から33,528.7町、すなわち約6.9%も減少している¹¹。人糞尿が施用されるべき農地はむしろ減少していたのである。

代替財・補完財としての化学肥料

化学肥料の登場と普及も、人糞尿の需要減に大きく寄与した。もっとも直ちに化学肥料が人糞尿を代替したわけではない。

1926（大正15）年、安芸郡の各村農会の技手たちは、各村の肥料の施用計画を提出したが、その中では人糞尿施用のリスクがしばしば指摘されていた。

熊野村（現安芸郡熊野町）の技手は人糞尿偏重の施用による病虫害の発生リスクを指摘し、仁保村（現南区仁保）の技手は「果樹類ニ対スル人糞尿乱用ノ警戒」が必要であると説いた。また中野村（現安芸区中野）の技手は、化学肥料について「現今使用者少キニ依リ益々宣伝シテ使用ヲ多カラシム」とし、化学肥料と廉価な大豆粕の併用や、人糞尿施用後の「磷酸、加里肥料ノ補給」などが必要であるとしていた¹²。人糞尿が肥料としては窒素過多であり、リン酸とカリウムが不足しやすいことが認識されるようになっていたのである。

星野高德氏は、肥料の主要な要素の一つである窒素1貫当たりの硫酸アンモニア価格を算出している。これによれば、1914（大正3）年から1916（大正5）年に3円を超えたものの、1919（大正8）年から1921（大正10）年の間に3円弱から1.5円前後まで下落した。さらに、その後も1930年代まで低廉化のトレンドは続いた¹³。1920年代以降、化学肥料は価格低下を続けていたのである。化学肥料が人糞尿の代替財であるとするならば、その低廉化と普及とは、人糞尿需要に大きな影響を与えたものと考えられる。

もっとも、中野村の技手が「補給」と述べていることからわかるように、この時点での化学肥料は人糞尿の代替財であるだけでなく、補完財としても認識されていた。化学肥料が補完財であるならば、このわずか3年前に温品村・船越村農会長らが人糞尿購入の拡大を企図したことで、各村の技手たちが人糞尿偏重の肥料施用を危惧したこととの間に大きな開きはない。化学肥料による「補給」を行うことで廉価な人糞尿の利用価値が高まるのであれば、化学肥料導入は人糞尿需要を増大させることもありうるからである。

しかし現実には、肥料市場の中での人糞尿のシェアは低下する。

多様な肥料の普及

安佐郡大林村（現安佐北区大林・大林町）では1918（大正7）年から1924（大正13）年の間に、人糞尿の施用は金額ベースで1,513円

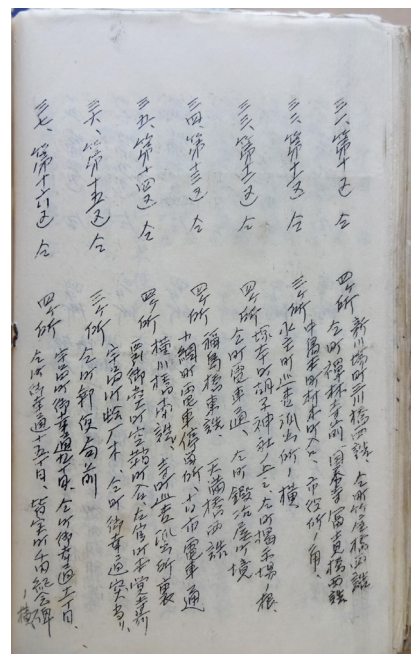


図7 広島市役所発、温品村農会長宛、1925（大正14）年12月19日付「公共便所及学校屎尿売却契約ノ件」部分（「農会二関スル書類」温品村役場2975）
この文書によれば、「公共便所」は市内の56ヶ所に設置されていた。橋梁付近9ヶ所、電車停留所や電車通り沿い7ヶ所、巡査派出所付近6ヶ所のほか、泉邸（現縮景園）や「千田記念碑」、寺院などランドマークの近隣にもみられた。また、「公共便所」に加え、市役所・学校・公設市場・市営住宅なども売却契約の対象となっていた。

から 1,361 円、数量ベースでは 50,457 貫から 45,372 貫へと減少していた。石灰の施用も急減している。これに対し、化学肥料等の動向を見ると、過磷酸石灰は金額ベースで 4 円から 147 円、硫酸アンモニアが 0 円から 390 円、調合肥料が 284 円から 815 円へと急増していた。また、魚肥・焼土・緑肥・大豆粕などの施用も数量・金額の両面で増加し、1918 年には施用の事実が確認できない家禽糞も、1924 年にはすでに施用されるようになっていたことがわかる。金額ベースでのシェアを見ると、1918 年から 24 年の間に、人糞尿は 19.9% から 7.7% へとシェアを落とした一方、10% 前後であった魚肥・焼土がそれぞれ 20% を超え、化学肥料 (調合肥料を合算) は 3.8% から 7.7% へとシェアを伸ばして人糞尿と並んだ。

化学肥料をはじめとする多様な肥料は、人糞尿を補完するだけでなく、部分的には代替しつつあった。

人糞尿市場の消滅

こうした供給増加・需要減少は、肥料市場における人糞尿価格を低落させただけでなく、市場を介した人糞尿の処理を困難にし、人糞尿の無償化をまねいた。この点については、公設便所に関するデータが参考になる。広島市設置の公設便所については、その数と、人糞尿の売却による収入額の値が公表されていた。広島市の公設便所数は 1920 (大正 9) 年の 73 か所から 1935 (昭和 10) 年の 49 か所へ、収入は 2,397 円 85 銭から 29 円 58 銭へと減少した。便所 1 か所当たりの収入を算出すると、1920 年には約 32 円 85 銭であったが、1935 年には約 60 銭、すなわち 15 年間で 1 / 54 以下にまで急減していたのである。さらに翌 1936 (昭和 11) 年の収入が 0 円と記録されていることも付け加えておきたい¹⁴。

また、1930 (昭和 5) 年、芸陽市町村農会連合会は「過渡期ニ於ケル一時的対策トシテ僅少ノ汲取料ヲ支出シテ之レガ処理ノ完全ヲ期シツ、来リ既ニ本年ノ如キ大多数ハ無料トシテ汲取り契約ヲ完了」したと称し、「汲取人ガ徒ラニ尿尿代金ヲ支払ツ、アルハ実ニ時代錯誤ノ甚シキモノナリ」と喝破していた (図 8)。このこともまた、人糞尿が既に市場価値を喪失していたことを示しているだろう。

市場価値を失なった人糞尿の処理方法は、市場を介した流通から無償による譲渡へ、さらには行政や一般の業者による処理へとシフトしていく。1931 (昭和 6) 年には、広島市の中心部の一部で、市によるし尿回収が行われるようになった¹⁵。汲み取られたし尿の多くは農村還元により処理されたとされているが¹⁶、近海への海洋投棄も行われたようである。海洋投棄については以下のような回想がある。宮島近海で潜水艦が「下肥をガツプリ被った」との苦情が海軍から広島市へ寄せられた。市の保健課長は「菊の御紋まで糞まみれにしたとあってはまかり間違えばお手打ちもの」と覚悟して鎮守府へ赴き、「広島市民がたれた下肥という証拠がありますか」と反問して事なきをえたという¹⁷。

行政による陸上での処理も検討された。1938 (昭和 13) 年 3 月 4 日付けで広島都市計画屎尿処理場設置の

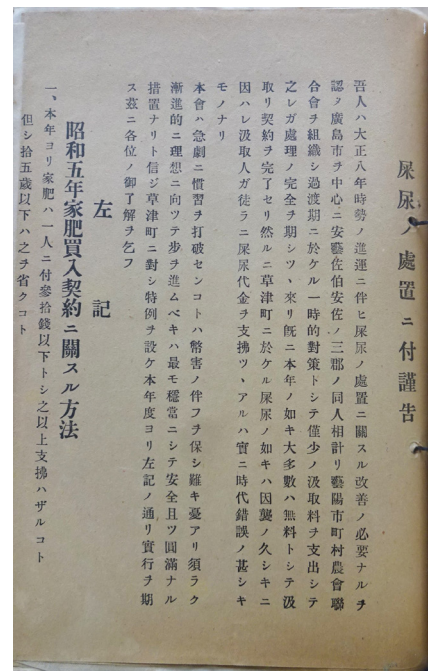


図 8 芸陽市町村農会連合会、1930 (昭和 5) 年 1 月付「尿尿ノ処置ニ付謹告」(「南町書類綴」草津南町総代資料 C1993-1149、部分)



図 9 愛宕踏切を渡る自転車と下肥樽を積んだ荷車を引く牛 (1958 (昭和 33) 年 1 月 15 日、明田弘司氏撮影)

計画が内務大臣より閣議に提出された。本資料は計画策定の理由を、「本市現在ニ於ケル屎尿排泄量ハ一日約千六百石ニシテ其ノ大部分ハ近郊農家ニヨリ適宜処分セラルルノ現況ナルモ近時農村ノ化学的肥料施用ノ増加ト人口増加ニ伴ヒ都心部各戸の屎尿汲取ハ次第ニ処理困難ナル事情ニアルニヨ」と説明している¹⁸。この計画は閣議決定されたものの、実現には至らなかった。

戦時・戦後の物資の欠乏は、人糞尿需要を一時的には回復または拡大させたと見られる。日中戦争とその長期化にともない、肥料の生産、流通、消費は政府の統制を受けることとなり、購入肥料の施用量は年々減少したからである¹⁹。

1945（昭和20）年8月6日朝、原爆投下直前の三篠地区では「平常とかわることなく、（中略）屋外には、牛馬車をひいた肥料の糞尿汲取りの百姓」の姿が見られたという²⁰。その日、汲取りのための「牛馬車」が実際に三篠地区を通過していたか否かはともかく、人糞尿を輸送する車両の往来が、ありふれた日常的な光景として想起されていること自体が、人糞尿の輸送と活用がなお盛んであったことを示していよう（牛馬による輸送については、時代が下るが図9参照）。戦時において化学肥料が不足する中で、近郊農村への人糞尿輸送は脈々と続いていたのである。

しかしながら、統制経済の時代が終わり物資不足も解消すると、化学肥料は肥料の中心を占めるに至る。1950年代後半の瀬野川町では、人糞尿・堆肥・緑肥なども施用されていたが、化学肥料の施用量は1,000万円を超え、肥料総額の約84%を占めていた。これに対し、人糞尿は約0.16%を占めるに過ぎなかった。もっとも人糞尿は、なお1万貫ほどは施用されていた²¹。市場価値は喪失しても、肥料としての施用が途絶したわけではなく、他の肥料に完全に代替されてしまったわけではなかったのである。

戸籍台帳・住民登録等に基づき集計された広島市の人口は、1958（昭和33）年には約42万人に達し、戦前・戦中のピークであった1942（昭和17）年の水準に回復した²²。その後も人口の増加基調は続き、し尿処理の問題は再び顕在化した。1950年代以降には行政・業者による汲み取りによりし尿回収が行われ、広島湾、大竹海域、高知県外洋と場所を変えつつ海洋へ投棄された（図10、11）²³。し尿の不法投棄や流出事



図10 バキュームカーでの汲み取り（1961（昭和36）年5月、広島市広報課撮影、E9-507）



図11 出島作業所の停泊所に接岸しているし尿海洋投棄船（1969（昭和44）年7月、広島市広報課撮影、E9-005-001）
船の前面には「広島」・「平和丸」と書かれている。



図12 出島し尿処理場（1978（昭和53）年4月、広島市広報課撮影、E9-513-001）

故なども発生した²⁴。戦前からの課題であった陸上での処理の本格化は、1967（昭和 42）年の南部処理場及び 1975（昭和 50）年の出島処理場設置を待たねばならなかった（図 12）。また、公共下水道の整備と便所の水洗化も進み、下水処理場におけるし尿の処理もその比重を増していった。2018 年 3 月末現在、広島市内の世帯の水洗化率は 97.5%に達している²⁵。

脚注

- 1 以下、肥料としての人糞尿は「人糞尿」とし、肥料としての市場価値を失った人糞尿は「し尿」と表記する。ただし、引用文は引用元資料の表記に従う。
- 2 『広島県史 近世 2』広島県、1984 年、pp.708-709、p.777 参照。
- 3 広島県内務部第二課「農事調査書 四」（1891（明治 24）年）。『広島県農業発達史 資料編』広島県信用農業協同組合連合会、1981 年、p.365）
- 4 広島県内務部第二課「農事調査書 一」（同上 p.29）
- 5 例えば、安佐郡大林村は 1909（明治 42）年 3 月 27 日付文書で「明治四十二年度大林尋常小学校糞尿」を「明治四十二年三月三十一日入札ヲ以テ売却ス」と告知している（「明治四十二年上司往復簿」大林村役場文書 573）。また、入札による売却を経ない人糞尿処理として、学校敷地の寄付者に対して「学校人糞尿永遠同家へ無料ニテ取得セシム」と定めていた、古頃尋常小学校（現庄原市比和町）の事例がある（神田三亀男「廃校跡の便所の石碑」『広島民俗』第 81 号、2014 年 3 月、p.53）。人糞尿の譲渡は、寄付者への反対給付としての価値を持ったのだろう。入札によるケースも入札によらないケースも、人糞尿が市場価値を有することを前提とする処理方法であった。
- 6 以下では、現広島市域の旧村については、初出時に現在の区名と地区名を示す。また、旧郡や旧町は、煩瑣を避けるため、現在地の表記を省略する。
- 7 井上竹市「長和久の渡しあれこれ」（『郷土の思い出・語り伝え』広島市公民館連合会、1984 年、pp.53-54）
- 8 「輸出入年報」（「統計諸表進達跡綴」1900（明治 33）年、温品村役場文書 2834）より引用・算出。1 荷はコエタゴ等で肩に担える程度の分量をさす。
- 9 『広島市議会史 統計資料編』広島市、1983 年、pp.118-119。なお、1920 年の人口には、1929 年合併の三篠町ほか 6 町村の人口を合算した。
- 10 『広島新史 資料編Ⅳ（統計資料編）』広島市、1984 年、pp.36-37 より算出。ただし、広島市の人口には、1984 年までに合併した町村の人口が合算されている。
- 11 以上は「田畑自作地小作地反別」（1920（大正 9）年 12 月 31 日現在）『広島県統計書 大正 9 年版 第 3 編（勸業）』および「耕地面積」（1935（昭和 10）年 12 月 31 日現在）『広島県統計書 昭和 10 年版 第 3 編（勸業）』より引用・算出。
- 12 「肥料ニ関スル計画」（「往復文書綴」1926（大正 15）年度、温品村役場文書 2986）
- 13 星野高徳「戦前期名古屋市における屎尿処理市営化 屎尿流注所を通じた下水処理化の推進と農村還元処分の存続」『社会経済史学』84-1、2018 年、p.54。なお、引用した硫安価格は、1912 年を基準年として実質化した値である。
- 14 以上は「公設便所」『大正 11 年 第 18 回 広島市統計年表』（1924（大正 13）年）および「公設便所」『昭和 11 年 第 31 回 広島市統計書』（1939（昭和 14）年）より引用・算出。
- 15 『快適で美しい都市をめざして 広島市の清掃事業のあゆみ』広島市環境事業局、1990 年、p.19
- 16 前掲『快適で美しい都市をめざして 広島市の清掃事業のあゆみ』pp.19-20 ほか
- 17 小野勝「記者くづれの反骨メモ」（『ひろしまの歩みとともに』広島市退職公務員連盟、1972 年、pp.203-204）。この事件の年代や詳細は判明しないが、回想がおおむね時系列に従った順序で箇条書きされていることから、藤田若水市長在職時（1939 年～1943 年）のことでありと考えられる。
- 18 「平塚都市計画街路○広島都市計画塵芥焼却場、同屎尿処理場決定ノ件」（「公文雑纂・昭和 13 年・第 54 巻・都市計画 3」国立公文書館デジタルアーカイブ、2020 年 1 月 6 日アクセス確認）
- 19 『広島県史 近代 2』広島県、1981 年、p.855
- 20 『広島原爆戦災誌 第 2 巻』広島市役所、1971 年、p.804
- 21 『瀬野川町建設計画書』瀬野川町、1960 年、pp.132-135
- 22 『広島市統計書』平成 30 年版、広島市、2019 年、pp.17-18
- 23 被爆 70 年史編修研究会編『広島市被爆 70 年史』広島市、2018 年、p.460
- 24 『広島新史 市民生活編』広島市、1983 年、p.171
- 25 前掲『広島市統計書』平成 30 年版、p.201

展示資料一覧

No.	資料名	作成年等	種別	所蔵・提供等
1	日清戦争の戦場へ向けて宇品港を出発する兵士たち	明治 27 (1894) 年 ごろ	写真	国立国会図書館デジタルコレクション
2	市内研屋町に設けられた門	明治 38 (1905) 年	写真	袋町小学校所蔵
3	広島大手町一丁目	大正期	写真	
4	広島市の伝染病患者数 〔『広島市立舟入市民病院開設 120 周年記念誌』〔広島市立病院機構舟入市民病院、平成 28 (2016) 年〕より作成〕		グラフ	
5	温品村輸出入年報 明治 28 年分 〔『統計諸表進達跡』明治 29 年 温品村役場文書 2832〕	明治 29 (1896) 年	史料	
6	近郊農村の移出入額 (温品村) 明治 25 年～ 29 年 〔『輸出入年報』各年版 (温品村役場文書 2830、2832、2833) より作成〕		グラフ	
7	『広島諸商仕入買物案内記並二名所しらべ』 「肥買入売捌所並二旅籠屋商 広島台屋町 信家九兵衛」 「干鯛海苔問屋並二綿類 広島京橋町北側 大藤新八」	明治 16 (1883) 年	史料	
8	太田川の帆船	昭和 12 (1937) 年	写真	渡辺襄氏撮影
9	明治十八年間肥料買入高及金額表 〔『諸進達 甲』明治 19 年 中山村役場文書 255〕	明治 19 (1886) 年 3 月 7 日	史料	
10	明治期の肥料購入額 (中山村 明治 18 年)		グラフ	
11	温品村農会長・船越村農会長発、各町村長・農会長宛、大正 12 年 1 月 17 日付文書 〔『農会ニ関スル書類』大正 12 年度 温品村役場文書 2973〕	大正 12 (1923) 年	史料	
12	配付種子栽培ノ大要 〔『農会ニ関スル書類』大林村役場文書 2725〕	明治 43 (1910) 年	史料	
13	肥料消費額取調ニ関スル件回申 〔『統計諸表類』大正 5 年 温品村役場文書 2850〕	大正 5 (1916) 年 1 月 20 日	史料	
14	大正期の肥料施用額 (温品村、大正 5 年)		グラフ	
15	肥料ニ関スル計画 〔『往復文書綴』大正 15 年度、温品村役場文書 2986〕	大正 15 (1926) 年	史料	
16	人糞尿施用に対する各村農会技手の見解 (同上資料により作成)		表	
17	芸陽市町村農会連合会発、安芸郡温品村農会長宛、大正 13 年 11 月 10 日付文書 〔『農会ニ関スル書類』大正 13 年度 温品村役場文書 2974〕	大正 13 (1924) 年	史料	
18	懇願 〔『往復文書綴』昭和 4 年度 温品村役場文書 2989〕	昭和 4 (1929) 年 3 月 12 日	史料	
19	広島市の人口と公衆便所からの収入の変化 〔『広島市統計年表』・『広島市統計書』各年版より作成〕		グラフ	
20	公共便所及学校尿尿売却契約ノ件 〔『農会ニ関スル書類』大正 14 年度 温品村役場 2975〕	大正 14 (1925) 年 12 月 19 日	史料	
21	尿尿ノ処置ニ付謹告 〔『南町書類綴』草津南町総代資料 C1993-1149〕	昭和 5 (1930) 年 1 月	史料	
22	広島都市計画塵芥焼却場、同尿尿処理場決定ノ件 〔『公文雑纂』昭和十三年・第五十四巻・都市計画三〕	昭和 13 (1938) 年	史料	国立公文書館デジタルアーカイブ
23	・肥料配給統制廃止に伴う措置に関する件 昭和 25 年 〔『肥料一件』昭和 25 年度 大林村役場文書 2667〕 ・肥料配給公団配給機構図 昭和 22 年 〔『肥料関係書類綴』昭和 22 年 大林村役場文書 2617〕		史料	
24	昭和 10 年代以降の広島市の人口と市による尿尿処理量 〔『広島市議会史 統計資料編』〔広島市議会、昭和 58 (1983) 年〕、『広島市統計書 平成 29 年版』〔広島市、平成 30 (2018) 年〕より作成〕		グラフ	
25	『広島市勢要覧』 昭和 17 年版 広島市	昭和 17 (1942) 年	史料	

No.	資料名	作成年等	種別	所蔵・提供等
26	霧の風景 天秤で肥えを運ぶ人	昭和 30（1955）年 12 月 11 日	写真	明田弘司氏撮影
27	愛宕踏切を渡る自転車と下肥樽を積んだ荷車を引く牛	昭和 33（1958）年 1 月 15 日	写真	明田弘司氏撮影
28	『瀬野川町建設計画書』 瀬野川町	昭和 35（1960）年	史料	
29	昭和戦後期の肥料施用額（瀬野川町、昭和 30 年代前半ごろ）		グラフ	
30	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1 バキュームカーでの汲み取り 昭和 36 年 5 月 ・ 2 南千田町のし尿処理場 昭和 34 年 10 月 ・ 3 出島作業所のし尿投入作業 昭和 44 年 7 月 ・ 4 出島作業所の停泊所に接岸しているし尿海洋投棄船 昭和 44 年 7 月 ・ 5 外洋投棄船大柏丸と積込施設 昭和 47 年 12 月 ・ 6 出島し尿処理場 昭和 53 年 4 月 		写真	広島市広報課撮影
31	高知・広島両県知事、昭和 47 年 9 月 13 日付「覚書」写 （「ごみ、し尿関係一件」昭和 47 年度 熊野跡村役場文書 531）	昭和 47（1972）年	史料	
32	肥船	昭和 7（1932）年 ごろ	写真	深崎敏之氏蔵、広島市郷土資料館提供